
LINE

SORA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LINE

【Nコード】

N4616A

【作者名】

SORA

【あらすじ】

龍と出会った翔は龍を王にするため、兄と戦うために旅にでる。

銀色の龍 1話

翔の朝の目覚めはいつも最悪だ。

今日もリビングで両親がケンカしている。

原因は突然いなくなった兄だ。

何でもできる自慢の息子が姿を消し、残ったのができそこないの息子だ。

きつと何で僕じゃないんだって二人とも思ってる。

翔はリビングへと続く階段を下りると、キッチンに向かいパンと冷蔵庫からサラダを取り出しいつもの席に座った。

リビングではキッチンの隅で小さくうずくまって泣いている母と、ソファアに座りながらテレビを見ている父がいた。

お互い声をかけるでもなく、まるでここには自分以外存在しないかのようなそぶりだ。

「・・・おはよう。」

翔は小さくつぶやいてみる。

しかし、返事などかえってこない。

これもいつものこと。

この家には家族というものはない。

でも、兄がいるときはこんなじゃなかった。

毎日あさからにぎやかで父さんはいつも僕のと看りで新聞を読みながら世の中のことを僕たちに話してくれた。

母さんはキッチンでいつもコトコト何か料理をしながら僕たちの会話を聞いて笑っていた。

兄さんはいつも家族の中心で笑いがおこる場所には必ず兄さんがいた。

兄さんのいなくなったこの家は静まりかえってしまった。

父さんが急に立ち上がると翔の方をチラッと見て外へと出て行った。その後をヒステリックぎみの母さんが追った。

外からはまた怒鳴り声が聞こえ母さんが荒々しく中に入ってきた。

しかし、僕にかまうことなく奥の部屋へ行ってしまった。

あの人たちは知っているだろうか。

怒られるより無視される方が心が痛むということ。

翔は朝食を食べ終わるとりんごをリュックに入れて外へ出た。

翔の家は村のはずれにあり、裏にはすぐ大きな森が広がっている。

この森を越えると小さな丘になっているところがあって、その先は崖だ。

この崖の高さは100メートルは軽くありそうなくらい高い。

その崖の先に立つと、城が見える。

おもちゃのように小さく見えるけど本当はすごくでかいんだろうな。

丘は僕と兄さんの秘密の遊び場。

村の子供たちは森に入ると迷って出てこれなくなるので誰も近寄らない。

でも、兄さんが迷わずに行ける道を教えてくれた。

兄さんは何でも知っていた。

食べられる木の実や鳥の名前、昔話やずっと遠くのお城のこと。

そんな兄さんがいなくなったんだ。

僕だって寂しくないわけがない。

でも、父さんや母さんの方がもっと悲しいみたいだ。

森を抜け、丘にでると古い切り株の上に腰を下ろした。

「空はこんなに青いのかなあ。」

翔は寝転んだ。

「痛いっ!!」

翔の背中から甲高い声が発せられた。

翔は驚いて立ち上がると声のした方を見た。

「ドラゴン?!」

翔はあまりにビックリしたので声が裏返ってしまった。

「痛いなあ。羽が折れたらどうしてくれるんだよ!」

龍はそう言うとは後ろを向いて翔がふみつけた羽を見せた。

その龍はとても小さかった。

立っても切り株ぐらいの高さしかないから50センチくらいか。

龍の鱗は銀色で太陽の光にあたりキラキラ輝いていた。

ひととき目を引くのが金色の瞳。

鱗が銀色だから瞳だけがういて見える。

それにしても小さい。

「お前! 小さいとか今思っただろ!! これでも本当の姿はもっと大きいんだ。人間のいる世界に来るときはばれないように小さくなってるだけなんだ!」

「でも、僕にばれちゃったね。」

翔の言葉を聞き龍は固まった。

「やつちやったあ……」

龍は頭を抱えこむと周りをくるとまわった。

「大変だ！！最初に姿を見せるのはディパンだけって言われたのに・・・これじゃあパパに怒られちゃう。」

龍は半べそをかきながらぶつぶつ独り言をいつている。
なんなんだこいつ。

翔はあきれ声で言った。

「じゃあ、会わなかったことにすればいいだろ。」

「え？」

「だいたい龍に会ったなんて誰かに言っただって信じてもらえるわけないし、言わないよ誰にも。」

「ダメなんだ。僕のパパは龍の世界の王様なんだ。何でもお見通しなんだよ。君が僕に会わなかったって言ってもパパにはばれてる。」

「じゃあ、謝りにいけば？」

「行けるわけないだろ！パパは怖いんだ。約束破るとパパのざらざらした手で鱗を逆撫でされるんだ。あのぞわぞわってした感じ・・・うう、考えただけでも恐ろしい。わかるだろ？」

「多分、同じ龍だったらわかるだろうね。」

龍は頭を抱えたまま地面に倒れた。

「だいたい、何でこんなところに龍がいるんだよ。」

「龍は大人になるために人間界に一度修行をしに来るんだ。そこで一人の人間と組んでその人間が死ぬまで一緒に旅をするんだ。」

「お前はまだどう見たって修行って年じゃないだろ。」

「そうなんだよお。僕にはお兄さんがいるんだ。それで、どっちが王になるかこの修行で決めるって言われて。まだ僕は小さいから課題をこなせば帰れるんだけど・・・。」

「じゃあ早くこなして帰れよ。」

「人間界に来て一番最初に見られた人間と組まなくちゃいけないんだ。君と組んだら一生帰れないよお。いやだあ！！！」

「それはこっちのセリフだ！もう帰れよ！！！」

翔はそう言うのと龍に背を向けて歩き出した。

すると龍は慌てて翔の足にしがみついた。

「待ってえ、行かないで!!」

「放せ!!」

翔は龍を振り切ると駆け足で家へと戻った。

銀色の龍 2話

翔が家に入るといつものように机の上にぽつんと翔の分の食事が置かれており、人影はなかった。

きっとまた部屋に閉じこもって兄のアルバムでも見てるんだろ。

翔はお昼を食べていないことを思い出した。

椅子に座り遅い昼食を食べ始めた。

今日はカレーライス。

「おいしそうだな。」

翔は声のする方を振り向いた。

「あのときの！」

龍はこちらに向かってパタパタと飛んできた。

「何しに来たんだ？」

翔はイライラしながらたずねた。

龍は翔の目の前に座り込むとしっぽをつかんでもじもししながら言った。

「僕のディパンになってくれ。」

「ディパン？」

「相方みたいなもんだ。一緒に旅に出よう。」

「・・・・・・」

「君の血を僕の背中につけてくれたら契約成立だ。血はほんの少しでいいんだ。」

「嫌だね。」

翔が言い放つと龍はとぼとぼ歩いて机のはじまで行くと、窓から外へと飛んで行ってしまった。

「はぁ・・・・。」

翔は僕がいなくなったら両親がよけいに悲しむと思っていた。

いや、そうなって欲しいと願っていた。

そういえば昔から父さんも母さんも兄さんばかりに優しくしていた。僕に対しても決して優しくないわけじゃないけど、どこかよそよそしかった。

僕は愛させていないんだ。

いつもそんなふうに感じずにはいられない。

だから、怖いんだ。

僕がいなくなっても痛くも痒くもない両親を見るのが。

翔はいきなり立ち上がると龍の後を追いかけた。

どのぐらい走っただろう。

僕にはとっても短い時間に感じられたが、太陽はすでに姿が見えなくなっていた。

最初に会った丘につくと、龍は寂しそうに切り株の上で頭をたれて座っていた。

「僕、ディパンになるよ。」

翔がそう言うと、龍が振り返り抱きついてきた。

「ありがとう！！でも、急にどうしたの？」

「もしかしたら行方不明の兄さんも僕みたいに龍に出会って旅に出たのかもしれない。兄さんは僕たちが悲しむからって別れも言わずに行ったのかもしれない。そうだとしたら旅に出れば会えるかもしれないだろ！」

翔の声は弾んでいた。

「僕は翔よろしく。」

「僕は龍王の息子、ウィンだ。」

翔とウインはお互いの手を取り、握手をした。

「何だあれは？」

ウインはつぶやいた。

翔が後ろを振り向くと村の方の空が赤く光っていた。

焦げ臭いにおいが森中を包んでいる。

何かが燃えている・・・？

「村が燃えている！行かなくちゃ！」

翔は叫ぶと走り出した。

村は火の海だった。

生き地獄という言葉がこれほどふさわしい場所はないだろう。道にたくさんの人が倒れている。

血を流している人もいれば焼け焦げた人もいる。

そこら中からうめき声が聞こえ、以前の村の面影はどこにもなかった。

「何があったんだ？」

あまりのひどさに翔は息をのんだ。

「翔、家に戻ろう。」

翔は黙ってうなずき、村の中へと歩き始めた。

小さな星がこの村に落ちたのだろうか。

夜だというのに村の中は昼間のように明るい。

家につくと、火の中で人影が動いた。

「父さん？母さん？」

翔の声は震えていた。

人影が翔の声に気がつき、外に出てきた。

その姿を見て翔は凍りついた。

「……兄さん？」

少し長めの黒髪に引きずりそうな長いコート、胸には逆さまの十字架が不気味に輝いている。

冷たい微笑みを浮かべるその顔は確かに翔の2つ年上の兄、光だ。

「あの右手。」

と、ウィン。

光の右手を見ると、手の甲に複雑な紋様が青白く浮き上がっている。

「あれはディパンの契約を結ぶとできるんだ。あの紋様を使って龍の力を操ることができるんだ。」

やっぱり光は龍と……。

じゃあこの炎は光が？

「ウィンじゃないか？」

声と共に青い色の龍が光の後ろから出てきた。

光も長身だが、龍は光よりも大きい。

そして炎より赤い瞳でこちらを見つめている。

「……パリス。」

ウインの顔は驚きでいっぱいだ。

「知り合い？」

翔の問いにウインは顔を曇らせた。

「僕の兄だ。」

ウインの兄！？

まさかウインの兄が光のディパンだったなんて。

ずっと黙っていた光が口を開いた。

「おもしろいもんだな。お前がパリスの弟と組んでいるなんて。」

光は皮肉に微笑んだ。

以前こんな笑い方をする光ひ翔は見たことがなかった。

「お前だけは助けてやろうと思っていたのに。事情が変わった。」

「何でこんなこと・・・。」

「パリスを龍王にするのに邪魔だったから。それだけのことさ。」

光の声はとても冷たかった。

村一つ滅ぼすことに何の罪悪感もないらしい。

光はこんな人間だったのだろうか？

それとも僕がしらなかったただけだろうか？

いずれにしてもここで止めないで。

翔はウインの肩をつかんだ。

「契約をしよう。」

翔の力強い声にウインは頷いた。

翔は大きく息を吸うと光を見つめた。

翔は手をかじり血をウインのひたいにたらした。

すると二人の足元に魔方陣が現れた。

魔方陣は銀色に光り、くるくると回転しながら上へとゆっくり登り始めた。

ちやうど頭の上までくると、音もなく碎け散り雨のように翔にふりそそいだ。

右手がポウツと熱くなり魔方陣が浮かび上がった。

不思議な感覚だ。

体中が温かい。

右手がとてもピリピリする。

これがウインの力。

翔は右手を光に向けた。

怒りに任せて力を放つと翔と光の間に雷が落ちた。

「そんなんじゃないぞ。こうやるんだ。」

光は翔に向けて炎を放った。

炎はグルグルと円を描きながら迫ってくる。

しかし、翔は恐くなかった。

心の奥深くから熱く、しかしどこか冷静な感情が溢れ出てくる。

翔は炎を手を伸ばし受け流した。

「もう、兄なんて思わないよ。」

翔はそう言うのと右手に力を込め、光に向けて力を放った。

翔の放った力の塊は鳥の姿になり、一直線に光に向かっていった。

光はよけることもできず直撃した。

ボロボロになった光を見て翔は胸が苦しくなった。

「クソッ!! いったん退くぞ。」

そう言うのと光は消えた。

ため息をつくのと、翔はその場に座りこんだ。

「大丈夫か？翔。」

「あっ、父さんと母さんは!」

翔はがれきの山に入って行った。

ここに家があったなんて信じられないほど無残に焼けている。

今朝父さんが座っていたソファアのあった場所、母さんがうずくまっていたキッチン。

今まで当然のようにあったものが一瞬にしてなくなってしまった。

翔は声を出して泣いた。

「・・・・・・翔。」

かすかな声が翔の後ろから聞こえた。

「母さん!」

翔は母に駆け寄った。

母の姿は悲惨だった。

服も肌も焼け焦げている。

母は声を振り絞って言った。

「翔、ごめんね。あなたのことを愛していたの。光がいなくなったことでもいいでそれを伝えられなかった。」

「僕、ずっと母さんや父さんに愛されてないって思ってた。」

「あなたとどう接したらいいのかわからなかったの。だってあなたは……。」

言葉の途中で母は力尽きた。

翔は母を抱きしめると、敵をとることを誓った。

いくら兄でも許せない。

これが両親に対してやることか?!

あんなに兄さんがいなくなって心配していた両親を。

翔が母を埋めようと持ち上げるとポケットから何か光る物が落ちた。

「翔!!これ!!」

翔は母を下ろすと光っていたものを拾いあげた。

紫色に輝き丸い形をしている宝石だ。

「宝石?」

「そう!これにいれて。」

ウインはそう言うのと、金色のブレスレットを取り出した。

そのブレスレットには7箇所丸く穴があいているところがある。

ウインは翔から宝石を受け取ると、穴に差し込んだ。

ちょうどぴったりのサイズだ。

ウインは翔の方を見ると真剣な顔をした。

「こうやって7つの宝石を手に入れて先に完成させた方が王になる。」

「じゃあ、兄さんはこれを探していたんだ。」

「パリスより先に全部手にいれないと。」

「そうだな。」

そう言うのと翔は立ち上がった。

空はうつすらと明るくなっていた。

「出発だ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4616a/>

LINE

2010年10月11日23時31分発行